

四十六、ささぐりと大陸文化

鎌倉時代というところから七百年から九百年ほど前になります。この頃ささぐりは、中国大陸で言う宋から影響を受けた文化が盛んでした。このことは、ささぐりの文化財が物語ってくれます。

昭和三十二年（一九五七）福岡県指定有形文化財に選定された若杉山太祖神社上宮に伝わる石造狛犬は、阿形の子持（雌）と吽形の玉取（雄）獅子の一对で、双方とも中国古来から伝わる想像上の動物である麒麟のように二又の顎鬚を持ち、加えて全身が柔らかな曲線で構成された大陸文化の影響を色濃く残す宋風狛犬と言われるものです。南宋時代（一二七〇年～一二七九年）の作と考えられます。

このような宋風狛犬は、宗像大社（宗像市）、飯盛神社（福岡市早良区）、観世音寺（太宰府市）、首羅山（久山町）にも伝わっています。

また、平成九年（一九九七）に発掘調査されたカブトの森運動公園の地下からは、北宋時代（九六〇年～一二七〇年）に浙江省の龍泉窯と福建省の同安窯で焼かれ、輸入された青磁（貿易陶磁）などが多数出土しています。このような貿易陶磁は、ささぐりの中世遺跡からも見つかっています。

前述の文化財は、明らかに北部九州が中国大陸との交易が盛んであったことを示唆するものです。

なぜささぐりにこのような大陸文化がもたらされたかと言うと、博多という大陸との貿易をしていた商人のまちと太宰府政庁との位置関係にあるようです。当時博多は、大陸文化の玄関口とも言われ、そこで荷揚げされた輸入品は「遠のみかど」である太宰府で検品された後、北部九州を中心とした各地へと広がっていきます。

ささぐりは、中世貿易都市の博多に近く、内陸への交通の要所でした。この立地のため当時既に中国製の輸入陶磁器を所有できる人々が住んでいた事がわかります。